

令和2年度

人間生活学総合研究科教授内容

教育福祉学専攻

東京家政大学大学院

R2 シラバス 教育福祉学専攻

(6)教育福祉学専攻(修士課程)

区分	授 業 科 目	単位数	必選別	担 当 教 員	備考(シラバスページ)
生涯学習・社会教育分野	生涯学習学特論	2	選	准教授 宮地孝宜	高専 P1
	生涯学習学演習	2	選	准教授 宮地孝宜	高専 P2
	社会教育学特論	2	選	教授 山本和人	高専 P3
	人間教育学特論	2	選	教授 山本和人	高専 P5
	教育福祉学特論	2	選	教授 井森澄江	高専 P6
	学校カウンセリング演習	2	選	講師(兼任) バーンズ亀山静子	高専 P7
	障がい者教育特論	2	選	兼任講師 半澤嘉博	高専 P8
社会福祉学分野	社会福祉学特論Ⅰ	4	選	教授 平戸ルリ子	高専 P9
	社会福祉学特論Ⅱ	2	選	准教授 田中恵美子	高専 P11
	社会福祉学特論Ⅲ	2	選	准教授 松岡洋子	高専 P12
	精神保健福祉特論	4	選	講師 福富律	高専 P13
	スクールソーシャルワーク特論	2	選	講師(兼任) 澁谷昌史	高専 P15
	現代家族法特論	2	選	講師(兼任) 金子和夫	高専 P17
心理学分野	発達心理学特論	4	選	教授 井森澄江	高専 P18
	臨床心理学特論	2	選	客員教授 近喰ふじ子	高専 P20
	心理学特論	2	選	准教授 佐藤隆弘	高専 P21
	教育評価・測定法	2	選	兼任講師 井上俊哉	高専 P23
	検査法演習	2	選	教授 井森澄江	高専 P24
	高齢者心理学特論	2	選	客員教授 西村純一	高専 P25
研究法分野	社会調査法Ⅰ	2	選	教授 山本和人	高専 P26
	社会調査法Ⅱ	2	選	教授 山本和人	高専 P27
	心理学研究法Ⅰ	2	選	教授 井森澄江	高専 P28
	心理学研究法Ⅱ	2	選	教授 井森澄江	高専 P29
研究指導	特別研究	10	必	教授 平戸ルリ子 准教授 井森澄江 山本和人 佐藤隆弘 田中恵美子	P30

※教職課程については、免許種別に、備考欄に記載した授業科目から24単位以上を履修する。

授業科目名：生涯学習学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：宮地孝宜
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生涯学習に関わる理念を理解し、説明することができる。</p> <p>生涯学習に関わる理論を理解し、説明することができる。</p> <p>それぞれの領域の研究成果、知見を理解し、説明することができる。</p> <p>生涯学習に関わる研究方法を理解し、計画することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>ユネスコの生涯教育論を出発点とするこれまでの政策動向、生涯学習を支援するための諸方策について、幅広く取り上げる。ただし、受講者のこれまでの学習状況により、授業内容を変更する場合もある。なお、本授業は、社会教育・生涯学習の現場におけるリーダー（高度専門職業人）としての人間性と広い視野の獲得を目指すものである。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス</p> <p>第2回：ユネスコの生涯教育論</p> <p>第3回：OECDのリカレント教育論</p> <p>第4回：その他の生涯教育・生涯学習論</p> <p>第5回：日本における生涯学習政策の展開</p> <p>第6回：生涯学習の実態</p> <p>第7回：学習者の特性と成人教育の理論</p> <p>第8回：生涯学習の方法</p> <p>第9回：生涯学習の支援者</p> <p>第10回：生涯学習の施設</p> <p>第11回：生涯学習における評価</p> <p>第12回：生涯学習とネットワーク</p> <p>第13回：現代的課題と生涯学習</p> <p>第14回：授業のまとめ</p>			
<p>授業外学修：授業前にはテキストおよび事前配付資料を熟読しておくこと。専門用語は事前に調べておくこと。なお、本準備学習には1時間程度の時間が必要である。</p>			
<p>テキスト：日本生涯教育学会年報各号</p>			
<p>参考書・参考資料等：日本生涯教育学会年報各号、その他は適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業の状況、演習課題、最終レポートの3面から評価する。評価割合は、授業への参加態度・演習課題50%、最終レポート50%とする。レポートについては、第14回前に提出し、第14回の授業のまとめにおいて、レポート内容についてフィードバックを行う。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：生涯学習学演習	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：宮地孝宜
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>成人教育および成人教育者の役割について理解し、説明することができる。</p> <p>成人教育の方法について理解し、説明することができる。</p> <p>成人教育プログラムを作成することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本授業は、成人教育および成人教育者の役割について検討する。具体的なテーマは授業計画の通りである。なお、本授業は、教育に関わる現場のリーダー（高度専門職業人）として、必要な理論と実践能力を身につけることを目指す。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス</p> <p>第2回：テキストの輪読(1)「第1章 成人教育者の養成と能力開発」</p> <p>第3回：テキストの輪読(2)「第2章 従来の能力開発の方策」</p> <p>第4回：テキストの輪読(3)「第3章 自己決定的な能力開発のための方策」</p> <p>第5回：テキストの輪読(4)「第4章 批判的なふり返り」</p> <p>第6回：テキストの輪読(5)「第5章 意識変容的な学習になる」</p> <p>第7回：テキストの輪読(6)「第6章 教育者の能力開発にみる一人ひとりの違い」</p> <p>第8回：テキストの輪読(7)「第7章 仕事や社会的背景の中での意識変容の展開」</p> <p>第9回：テキストの輪読(8)「第8章 専門職の能力開発のための新しい展望」</p> <p>第10回：テキストの輪読(9)「第9章 能力開発担当者の方策」</p> <p>第11回：成人教育プログラムの検討(1)アウトプットおよびアウトカム（指標）の設定</p> <p>第12回：成人教育プログラムの検討(2)支援方策の検討</p> <p>第13回：成人教育プログラムの検討(3)評価方法の検討</p> <p>第14回：授業のまとめ</p>			
<p>授業外学修：授業前にはテキストおよび事前配付資料を熟読し、発表資料（レジュメ）を準備すること。なお、本準備学習には3時間程度の時間が必要である。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>パトリシア・A・クラントン、入江直子・三輪建二完訳『おとなの学びを創る－専門職の省察的実践をめざして』鳳書房 2004 (Patricia A. Cranton, Professional Development as Transformative Learning: New Perspective for Teacher of Adults, Jossey-Bass 1996)</p>			
<p>参考書・参考資料等：日本生涯教育学会年報各号、その他は適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：授業の状況、演習課題、最終レポートの3面から評価する。評価割合は、授業への参加態度・演習課題50%、最終レポート50%とする。レポートについては、第14回前に提出し、第14回の授業のまとめにおいて、レポート内容についてフィードバックを行う。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：社会教育学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：山本和人
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>初めて社会教育を学ぶ院生には、社会教育の特徴、および、現状と課題を明確に理解し、評価できることを目標とする。また、既に社会教育についての知識を持った院生には、どのような視点から研究及び実践的な課題解決に向けた取り組みができるかを共に考えながら進める。「社会教育の理解」が今こそ求められる時代であり、「生涯学習のすすめ方」との異同を検討し、関係づけることができるようにする。学校教員を目指す者には、社会教育の重要性と、少子高齢社会の進展の中で学校・家庭・地域社会のつながりとその必要性、在り方、職業生活との関り、人生100年時代における学習活動・職業生活・地域生活・余暇生活の関りを理解し説明・応用できるよう課題を設定し、今後を予測できるようにする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>社会教育学特殊講義では、学校教育に対して理解しにくい社会教育について、教育学における社会教育学の位置、生涯学習との関連性を検討したうえで、学校・家庭・社会の領域における教育の特徴と関連性、職業生活、地域生活、余暇生活などと、社会変化の激しい時代における学習活動の意味と位置づけを検討する。場合によっては、課題追及的に一部を取り上げる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：教育学の中での社会教育 第2回：社会教育の概念・定義と社会教育法 第3回：社会教育の歴史と現在 第4回：学校と社会教育 第5回：地域生活と社会教育 第6回：中小企業の生涯学習支援 第7回：中小企業における事業主の生涯学習 第8回：女性のエンパワメントと社会教育・生涯学習 第9回：生涯学習の成果を生かす 第10回：地域活性化に果たす社会教育の役割 第11回：少子高齢社会の中での社会教育 第12回：社会変化の中でAIと生きる 第13回：人生100年時代を生きる 第14回：教育と学習の再考</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>各回のテーマに応じ、次回にかかわる内容の資料等を用意する予定である。そのため、事前事後における学習やまとめが必要になるので、少なくとも1～2時間は必要と考えられる</p>			
<p>テキスト：未定。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>未定。授業の中で指定、あるいは、配布</p>			

学生に対する評価：

社会教育の特徴を理解できているか。学校教育との関り、生涯学習との関わりと違い、変化する社会の中で、社会教育の在り方と課題を考え、新たに発見することができたかを評価する。平常点20%、小レポート30%、最終レポート50%で評価する。

その他：

授業科目名：人間教育学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：山本和人
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>人間は教育によってはじめて人間になることを、その必要な環境や条件、教育方法等について、教育学諸分野の知見から学び、評価・批判できるようにする。特に、日本の第二次世界大戦後において求められてきた「人間像」の変遷を、諸データをもとに振り返る中で、人間教育のあり方と、教育とは何か、人間とは何かを考える基本的視点を検討し、評価できるようにする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間の個人的な発達、家庭に始まり、学校や社会（集団）の中における教育的働きかけで達成されていく。そのプロセスの中で、どのような環境・条件、いかなる方法で、どのような教育的働きかけが行われていくのかについて検討する。また、集団や社会状況、およびそこで求められる「人間像」について明らかにする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：人間の発達段階 第2回：人間の発達課題とエージェント 第3回：教育の各領域での教育活動と成果 第4回：家庭の特殊性と教育 第5回：学校教育の特殊性 第6回：社会教育の多様さと「力」 第7回：教育の「制度」が持つ意味 第8回：カリキュラムの狙い 第9回：教育と社会化の再考 第10回：教育と福祉と「人格」 第11回：人間像の変化 第12回：能力とは何か 第13回：価値と人間 第14回：教育の「可能性」</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>教育学関係の書籍（教育論や教育の原理に関するもの）を少なくとも1冊は読み、講義テーマと関連する深めたいテーマについて、考えを深めておいてほしい。事前・事後学習2時間程度。</p>			
<p>テキスト：未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>未定。授業の中で指定、あるいは、配布。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>毎回の討議50%、および、最終レポート50%で評価する。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：教育福祉学特論	単位数：2単位	選択： (高専(公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の発達と家庭環境に関する発達心理学的研究法について述べるができる。 2. 人間の発達と家庭環境、特に親子関係との関連についての発達心理学的知見を述べるができる。 3. 地域社会において人を支援するために授業を通して得た知識・知見を適用できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>人間の発達と家庭環境、特に親子関係との関連について、発達心理学の観点から学ぶ。各時期の親子関係について概略を学んでから、子どもの発達と家庭環境をめぐる重要な論文の講読を行い、地域社会や学校にあって人を支援するために必要な知識や技術、また社会的決定への示唆についても学ぶ。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：人間の発達と家庭環境</p> <p>第3回：乳児期の親子関係</p> <p>第4回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (1) 愛着形成</p> <p>第5回：幼児期・児童期の親子関係</p> <p>第6回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (2) 親からの分離の影響</p> <p>第7回：青年期の親子関係</p> <p>第8回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (3) 父親と母親</p> <p>第9回：成人期の親子関係</p> <p>第10回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (4) 両親の離婚・争いの影響</p> <p>第11回：文化と親子関係</p> <p>第12回：「子どもの養育に心理学がいえること」の講読 (5) 家庭の貧困・体罰の影響</p> <p>第13回：関連した文献講読 (1) 乳幼児期</p> <p>第14回：関連した文献講読 (2) 青年・成人期</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>テキストの決められた章を読み、プレゼンの準備をする (2～3時間の学習時間を必要とする)。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>「子どもの養育に心理学がいえること－発達と家庭環境」シャプファー 新曜社</p> <p>「こころの旅－発達心理学入門」山岸明子 新曜社</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業時に提示する</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業への参加態度30%、演習課題40%、最終レポート30%とする。</p>			
<p>その他：演習課題については発表時にフィードバックを行う。</p>			

授業科目名： 学校カウンセリング演習	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名： バーンズ亀山静子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校臨床心理学やカウンセリングの理論を学び、教育分野での公認心理師の役割と任務を特定できる。 ・学校臨床心理学の展開として、児童生徒の学校生活への適応とそれを促すための様々な支援を背景理論とともに特定できる。 ・学校臨床心理学の実際として児童生徒、教職員、保護者への様々な支援方法を特定し、技能を演習する。 ・児童期・青年期の発達、学習科学、神経心理学に基づき、特別支援教育と行動問題との関連と介入方法を特定できる。 ・アメリカ合衆国、諸外国の学校臨床心理学の実際と日本の現状を比較できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>学校カウンセリングの意義と役割を明らかにし、学校カウンセリングの理論と実際について理解を深める。具体的には、学校臨床心理学の理論と実践的課題について、単一理論の安易な適応論ではなく、本質的な心理学的な課題について質疑を深めていきたい。また諸外国における学校カウンセリングや学校臨床心理学の現状課題を検討し対応の視点を深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：現代の子どもたちを取り巻く環境と学校臨床心理学 第2回：学校臨床心理学と学校生活適応における問題 第3回：学校臨床心理学と学習障害 第4回：学校臨床心理学と注意欠陥多動性障害 第5回：学校臨床心理学と自閉症スペクトラム 第6回：学校臨床心理学の展開と指導的支援 第7回：学校臨床心理学の展開と心理的支援 第8回：学校臨床心理学の展開と環境的支援 第9回：学校臨床心理学の実際 開発的支援と精神疾患 第10回：学校臨床心理学の実際 予防的支援 第11回：学校臨床心理学の実際 教職員への支援 第12回：学校臨床心理学の実際 保護者への支援 第13回：アメリカにおける学校臨床心理学 第14回：諸外国における学校臨床心理学・まとめ</p>			
<p>授業外学修：各回の授業に関する教科書部分を読み授業に参加し、復習も行うこと。予習・復習ともに約1時間程度ずつ。</p>			
<p>テキスト：配布物</p>			
<p>参考書・参考資料等：特になし</p>			
<p>学生に対する評価： 平常点50%、小課題20%、レポート30%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：障がい者教育特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：半澤嘉博
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>障がい者の社会参加・自立に向けての学校教育、社会教育、家庭教育の在り方の現状を把握し、基本的な認識をもつことができる。また、個別の支援計画を活用した具体的な支援や教育体系の在り方を考察することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>平成19年度からの特別支援教育への転換により、様々な障害者の教育は、個別の教育ニーズへの支援という視点から大きく見直しがなされている。また、障害者の権利条約の批准や共生社会づくりに向けてのインクルーシブ教育の重要性が示されている。このような状況を踏まえ、障害者教育の在り方や個別の支援計画の作成・実施を実践的に積み重ねていくことが重要である。知的障害や発達障害の事例を通して、具体的な支援の在り方を検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：特別支援学校や福祉施設、一般企業等における障がい者の実態把握（知的障がいを中心に） 第2回：個別の指導計画、個別の支援計画の考え方 第3回：個別の指導計画、個別の支援計画の作成 第4回：障がい者の支援の実践（1）及び評価（学校教育を中心に） 第5回：障がい者の支援の実践（2）及び評価（社会教育を中心に） 第6回：障がい者の支援の実践（3）及び評価（家庭教育、家庭支援を中心に） 第7回：指導実践の報告、事例検討 第8回：障害者の権利条約とインクルーシブ教育について 第9回：発達障害者の教育と福祉、労働について 第10回：個別の支援計画と関係機関との連携について 第11回：発達障害者の支援の実践（1）及び評価（LD、ADHD） 第12回：発達障害者の支援の実践（2）及び評価（自閉症全般） 第13回：指導実践の報告、事例検討 第14回：まとめ（最終レポート）</p>			
<p>授業外学修：</p> <p><事前学修>資料の通読やVTRの視聴等をあらかじめ行い、自身の観点による分析を行っておく。（そのレポートをもとに討論を行う。）（100分） <事後学修>受講者で話し合った指導内容等を受け、各自の授業改善に関するポートフォリオをまとめていく。（100分）</p>			
テキスト：特になし			
参考書・参考資料等：必要な資料は適宜配布する。			
<p>学生に対する評価：課題演習、最終レポートの両面から評価する。評価割合は、演習課題50%、最終レポート50%とする。</p>			
その他：特になし			

授業科目名： 社会福祉学特論 I	単位数：4単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：平戸ルリ子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>現代社会の人々の生活状況を踏まえ、課題を正しく認識できる。</p> <p>生活課題に即した社会福祉の制度やサービスについて理解できる。</p> <p>社会福祉の諸理論に特徴を、変化とともに理解できる。</p> <p>関連領域（社会教育や心理、医学など）と社会福祉の連携について考察できる。</p> <p>社会福祉の今後の動向について考察できる。</p> <p>社会福祉領域における、これからの自分の役割について考え実践の糸口をつかむことができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>前半は基礎文献を用い、社会福祉がどのように変化・発展してきたかを理解する。後半は、急速な社会変動と、それに伴う生活ニーズの変化に対応した近年の福祉改革に注目し、社会福祉の制度・対象・支援・財源等がどう変わろうとしているのか、課題と今後の見通しについて、ディスカッション等を交え認識を深める。ゲストスピーカーや現場機関の訪問も予定している。社会福祉の諸理論を学び、現状や課題を理解できる。社会福祉の今後の動向について考察できる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション。授業の進め方の説明と受講生の講義に対するニーズの確認</p> <p>第2回：社会福祉とは何か。「社会福祉」の言葉の変遷と理解</p> <p>第3回：慈善事業の段階と公的扶助</p> <p>第4回：貧困問題と社会事業の展開、救済に伴うスティグマ</p> <p>第5回：権利としての社会福祉の位置づけと現実理解。</p> <p>第6回：社会福祉学とは何か、社会福祉研究の特質を理解する。「実践現場」の視点と「研究」のバランス理解。</p> <p>第7回：社会福祉研究の諸理論の理解1 制度研究と援助技術論研究</p> <p>第8回：社会福祉研究の諸理論の理解2 孝橋、岡村、三浦、一番ヶ瀬など諸理論の特徴と理解</p> <p>第9回：社会福祉研究の諸理論の理解3 量的調査研究と質的事例研究の進め方。</p> <p>第10回：社会福祉研究の諸理論の理解4 社会福祉の国際動向と日本の比較検討</p> <p>第11回：ゲストスピーカー 歴史研究もしくは実践研究の研究者を招いての社会福祉研究の紹介</p> <p>第12回：実践からの問題提起、課題設定について考える。受講生によるディスカッション。</p> <p>第13回：急速な社会変動と社会構造の変化生活ニーズの変化。</p> <p>第14回：生活ニーズの変化と社会福祉サービスに求められるものの変化。</p> <p>第15回：社会福祉の主体と客体の移り変わり。</p> <p>第16回：社会福祉改革の背景と内容。</p> <p>第17回：社会福祉における公私の役割分担とその移り変わり</p> <p>第18回：指定管理制度と公的機関の今後。</p> <p>第19回：社会福祉サービスの手続き変更と仕組みの理解</p> <p>第20回：措置制度と契約制度の長所と短所。それぞれの意義。</p>			

<p>第21回：費用の自己負担制度の変更点と課題</p> <p>第22回：アセスメントとサービス評価。その利用の仕方と意義。</p> <p>第23回：現代の社会福祉現場の実情の理解。児童福祉ワーカー（ゲスト）の現場の話を伺う。 ゲストとのディスカッションも行う。</p> <p>第24回：社会福祉改革が進む実践現場の見学とワーカーのお話</p> <p>第25回：社会福祉の実践現場のワーカーとの質疑応答・ディスカッション（24回と2コマ連続で実施）</p> <p>第26回：社会福祉の現場における支援の特徴 当事者理解と自己決定の尊重</p> <p>第27回：社会福祉の現場実践における支援の課題</p> <p>第28回：医療や社会教育・心理など関連領域と社会福祉の関係と今後のあり方。ディスカッションと まとめのレポート作成。</p>
<p>授業外学修：</p> <p>毎時間後に課題を提示するので、それに関するレポートを作成する。調べたりまとめたりすること におおよそ3時間程度は割いて取り組む。また、講義で取り上げた事柄について新聞や論文を必ず読 む。</p>
<p>テキスト：</p> <p>使用しない。適宜資料を用意する。</p>
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>講義の中で、受講生にあわせて提示する。</p>
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点80%、レポート20%</p>
<p>その他：</p>

授業科目名：社会福祉学特論Ⅱ	単位数 2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：田中恵美子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害の多様性について想像力をもって理解することができる。 ・障害の切り口から見える現代社会の課題について理解することができる。 ・障害のある人とともに生きる社会のあるべき姿について考察することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>社会福祉学特論Ⅱでは、社会福祉分野において専門的研究を進めるために必要な障害に関する知識の習得を目指す。特に障害の社会モデルの考え方に則り、多様な障害のとらえ方について理解を深める。授業では内外の文献にあたるほか、ゲスト講師などを交えての議論も検討する。より実践的な知識・技術の習得を目指して、可能であればフィールドワークも行いたい。各自の関心テーマに沿ったプレゼンテーションの機会を与える予定なので、各自が活動・議論に積極的に参加し、自分の意見をまとめ他者に伝える技術の習得も行えるようにしたい。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：障害のイメージ</p> <p>第2回：障害の社会モデルについて（1）フィンケルシュタイン、オリバー等の理論</p> <p>第3回：障害の社会モデルについて（2）ろう宣言、障害の文化モデル、女性障害者の主張</p> <p>第4回：優生学—障害の意味</p> <p>第5回：自立生活運動（1）歴史—日本</p> <p>第6回：自立生活運動（2）歴史—アメリカ・イギリス他</p> <p>第7回：自立生活を支える制度（1）パーソナルアシスタンス、ダイレクトペイメント</p> <p>第8回：自立生活を支える制度（2）日本の状況</p> <p>第9回：自立生活を支える制度（3）欧米の状況</p> <p>第10回：自立生活の実践 ゲスト・スピーカー（自立生活者）による講演 レポート課題の提示</p> <p>第11回：発表（1）理論 参加者の問題関心に沿って</p> <p>第12回：発表（2）実践 参加者の問題関心に沿って</p> <p>第13回：発表（3）展開 参加者の問題関心に沿って レポートの提出</p> <p>第14回：まとめ レポートへのコメント、フリーディスカッション</p>			
<p>授業外学修：障害者の生活に係る制度、歴史的にまた現状について新聞やニュース等大まかに学習しておくこと。また授業内で提示される資料を次回までに事前学習しておくことが求められる。実際に障害のある人の生活に触れるボランティア・学習会の参加等実践的な活動を行うことも推奨する。</p> <p>(事前事後学習2～3時間)</p>			
<p>テキスト：なし 必要に応じてレジュメ配布を行う。</p>			
<p>参考書・参考資料等：その都度提示する。</p>			
<p>学生に対する評価：授業内での積極性 40% レポート等課題提出 60%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 社会福祉学特論Ⅲ	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：松岡洋子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>日本における「地域包括ケア」の基礎概念である「エイジング・イン・プレイス（地域居住）」の理論と実践について理解している。</p> <p>主要国の状況を理解し、国際的な視点から日本の課題について理解して考察することができる。</p> <p>多くの論文に触れることで、論文の構成、調査手法、論旨の進め方などを理解している。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>エイジング・イン・プレイス（地域居住）概念と実際について、基本参考書と内外の文献をもとに高齢者居住（住宅政策）と地域ケア（ケア政策）の理論を踏まえながら学ぶ。テキストを使用するが、論文購読（英文含む）を多く取り入れ、最新の動きにふれることができるように工夫する。</p> <p>論文を批判的に読むことを通して、論文の構成、調査手法、論旨の進め方などについても学び、修士論文執筆の土台形成に役立てる。授業形式は、前半は講義形式、後半は課題発表にて構成する。</p>			
<p>授業計画：</p> <p>第1回：エイジング・イン・プレイスという概念：背景</p> <p>第2回：エイジング・イン・プレイスという概念：構成概念</p> <p>第3回：エイジング・イン・プレイスと高齢者居住：世界の住宅政策</p> <p>第4回：エイジング・イン・プレイスと高齢者居住：日本の住宅政策</p> <p>第5回：エイジング・イン・プレイスと地域ケア(ケア政策)：世界の地域ケア</p> <p>第6回：エイジング・イン・プレイスと地域ケア(ケア政策)：日本の地域包括ケア</p> <p>第7回：エイジング・イン・プレイスと地域福祉：世界のインフォーマルサポート (ボランティア活動、家族介護と支援等)</p> <p>第8回：エイジング・イン・プレイスと地域福祉：日本のインフォーマルサポートと介護保険総合事業</p> <p>第9回：発表：諸外国の実践（1）デンマーク</p> <p>第10回：発表：諸外国の実践（2）オランダ</p> <p>第11回：発表：諸外国の実践（3）イギリス</p> <p>第12回：発表：日本の課題（1）：日本の住宅政策・ケア政策</p> <p>第13回：発表：日本の課題（2）：日本への政策提言</p> <p>第14回：まとめ：1年の振り返り&ディスカッション</p>			
<p>授業外学習：テキストの事前購読、提示された論文の事前購読、発表準備など、毎回行うこと。</p> <p>事前事後学習2～3時間。</p>			
<p>テキスト：松岡洋子『エイジング・イン・プレイスと高齢者住宅』2011、新評論</p>			
<p>参考書・参考資料等：その都度紹介する。英語文献（論文）も含まれる。</p>			
<p>学生に対する評価： 授業への事前学修30%、授業への参加態度30%、課題提出40%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：精神保健福祉特論	単位数：4単位	選択： (高専(公民))	担当教員名：福富 律
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・精神保健福祉分野の基礎を学び、近年の動向を論じることができる。 ・ソーシャルワーク実践の基礎理論と精神保健福祉分野の地域生活支援活動との関連を論じることができる。 ・先駆的な実践を学び、各自の研究テーマと関連づけて検討できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>精神保健福祉分野における実践を、ソーシャルワーク研究の観点をもち、フィールドワークを通して理解する。現場実践に寄与できる研究、実践力を高めることにつながる研究を意識して、双方向に授業を展開する。多種多様な環境、地域性を踏まえて行われてきた各地の実践の特性を検討することから、現在求められている実践に示唆するものは何かを探る。心理・教育・福祉の現場のリーダーとして、必要な理論と実践能力、課題解決能力を身につけられるようにする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：精神障害者の地域生活支援活動の意味</p> <p>第2回：精神障害者の地域生活支援活動の現状（文献等からの情報収集）</p> <p>第3回：精神医療・保健・福祉に関する法制度の歴史</p> <p>第4回：精神障害者の処遇の歴史と制度との関連性</p> <p>第5回：諸外国における精神保健福祉（1）ヨーロッパ諸国</p> <p>第6回：諸外国における精神保健福祉（2）アメリカ、カナダ</p> <p>第7回：家族支援と家族会活動</p> <p>第8回：ピアサポートと当事者活動</p> <p>第9回：障害者総合支援法の分析</p> <p>第10回：精神障害者の地域生活と制度との関連性</p> <p>第11回：精神障害者の地域生活支援活動に関する先行研究資料の収集</p> <p>第12回：精神障害者の地域生活支援活動と居住支援</p> <p>第13回：精神障害者の地域生活支援活動と就労支援</p> <p>第14回：精神障害者の地域生活支援活動と相談支援</p> <p>第15回：精神障害者の地域生活支援活動と精神科医療（1）資料調査</p> <p>第16回：精神障害者の地域生活支援活動と精神科医療（2）精神科病院における実地調査</p> <p>第17回：精神障害者の地域生活支援活動と精神科医療（3）精神科診療所における実地調査</p> <p>第18回：相談支援事業における地域展開の経過と現状</p> <p>第19回：相談支援事業のモデル（1）「帯広ケアセンター」資料調査</p> <p>第20回：相談支援事業のモデル（2）「豊芯会」実地調査</p> <p>第21回：相談支援事業のモデル（3）「やどかりの里」実地調査</p> <p>第22回：相談支援事業とケアマネジメント</p> <p>第23回：相談支援事業とコミュニティワーク、ソーシャルアクション</p>			

第24回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（1）理論史からの分析
第25回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（2）援助関係論からの分析
第26回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（3）グループ理論からの分析
第27回：ソーシャルワーク実践としての地域生活支援活動（4）新しい取り組みの評価
第28回：まとめ

授業外学修：授業前に文献を読んで資料を作成して授業に臨み、授業後は授業内容レポートをまとめて次回授業で提出（毎回3時間程度必要）

テキスト：

特に定めない（履修者の基礎知識によっては、相談の上で指定することもある）

参考書・参考資料等：

随時紹介する

学生に対する評価：

平常点50%、課題レポート50%

その他：

授業科目名： スクールソーシャルワーク特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：澁谷昌史
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本講義は、我が国のスクールソーシャルワーク実践にかかる専門知識の体系的な獲得をテーマとしている。本講義を受講したのちには、以下の3つの目標が達成できるようにする；</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校という組織の特性を踏まえて、我が国のスクールソーシャルワーク実践の特徴を説明できる。 2. スクールソーシャルワーカーを雇用する制度の実状を踏まえて、我が国のスクールソーシャルワーク実践の特徴を説明できる。 3. 我が国において、スクールソーシャルワーカーが学校教育をどのように変えていくことが期待されているのかを説明できる。 <p>なお、これら能力は毎授業内での口頭発表を通じて涵養されるものであり、その成果の積み重ねは最終的な評価に反映される。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>我が国のスクールソーシャルワーク実践にかかる専門知識の体系的理解に焦点を当てた講義である。具体的には、以下の3つの内容について取り扱う；</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校という組織の特性とはどのようなものなのか。 2. どのような制度のもとでスクールソーシャルワーカーの実践の場が作られているのか。 3. スクールソーシャルワーカーが何を考え、どのように行動しているのか。 <p>なお、本授業は、教育福祉学専攻の学位授与方針に即し、我が国のスクールソーシャルワーク実践にかかる専門知識を身につけることで、学校におけるチーム支援に従事する高度専門職業人として活躍できる人材養成につながるものである。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：シラバスに基づき講義内容を説明する</p> <p>第2回：スクールソーシャルワーク論のための予備知識——子育て家庭に見られる社会福祉問題</p> <p>第3回：スクールソーシャルワーク論のための予備知識——ソーシャルワーク概論</p> <p>第4回：学校内の児童生徒支援体制——生徒指導体制をスケッチする</p> <p>第5回：学校内の児童生徒支援体制——学校教育相談の必要性</p> <p>第6回：学校内の児童生徒支援体制——「チーム学校」を作る意味</p> <p>第7回：スクールソーシャルワーク概論——史的発展</p> <p>第8回：スクールソーシャルワーク概論——スクールソーシャルワーカー活用事業</p> <p>第9回：スクールソーシャルワーク概論——スクールソーシャルワーカーと配置方式</p> <p>第10回：スクールソーシャルワーク実践論——学校から受け入れられる</p> <p>第11回：スクールソーシャルワーク実践論——スクールソーシャルワーカーの業務内容</p> <p>第12回：スクールソーシャルワーク実践論——「黒子」としての活動</p> <p>第13回：スクールソーシャルワークの事例検討——マイクロ実践</p> <p>第14回：スクールソーシャルワークの事例検討——メゾ実践</p>			

授業外学修：図書館のデータベースを積極的に活用する方法により、毎授業前に授業計画に即した文献を1件以上見つけ、その要旨について口頭で発表できるようにまとめてくる。3時間程度の学習時間を要する。

テキスト：なし

参考書・参考資料等：随時紹介する

学生に対する評価：授業への参加態度及び口頭発表課題の2面から評価する。評価割合は、授業への参加態度50%、口頭発表課題50%とする。

その他：口頭発表課題へのフィードバックは、①主張・論点の提示、②発表の内容・構成、③発表資料の使用、④発表にあたっての態度の4項目にわけ、発表が行われたその場で行う。

授業科目名：現代家族法特論	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：金子和夫
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>社会福祉や教育の実践現場において、高齢者や児童、障がい者等の生活支援に必要とされる家族法について、その基礎を理解し説明できるとともに、課題が考察できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>家族法は民法の親族法と相続法からなるが、この授業では、おもに親族法の理解を深めることを目的とする。具体的には、社会福祉の現場における権利行使や権利救済等の観点から、親族法・相続法に係わるいくつかの問題をテーマとして設定し、実態・法制度（判例を含む）・課題等について受講生とディスカッションを行いながら授業を展開する。テーマとしては、現代社会における家族形態の変化、婚姻・離婚、親子関係、扶養関係、相続の領域に関する問題を取り上げ、各種統計資料や新聞等で実態を明らかにしたうえで、それに対応する法制度・政策研究、判例研究を行い、課題を検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：現代における家族形態の変化とその影響</p> <p>第2回：婚姻と離婚に関する法制度</p> <p>第3回：婚姻と離婚に関する判例研究と課題検討</p> <p>第4回：DV（配偶者間暴力）に関する実態、法制度、課題検討</p> <p>第5回：親子関係（嫡出子・非嫡出子〈婚外子〉・養子）に関する実態把握と法制度</p> <p>第6回：親子関係に関する判例研究と課題検討</p> <p>第7回：親権に関する法制度と判例研究</p> <p>第8回：児童虐待の実態把握と児童虐待防止法、行政機関の役割と課題</p> <p>第9回：扶養（特に老親扶養）に関する実態と法制度、判例研究</p> <p>第10回：社会的扶養と私的扶養の関係、生活保護の実態と課題、行政機関の役割と課題</p> <p>第11回：高齢者虐待の実態と法制度、行政機関の役割と課題</p> <p>第12回：相続に関する法制度と判例研究、課題検討</p> <p>第13回：成年後見制度の実態と法制度</p> <p>第14回：成年後見制度の判例研究と課題検討</p>			
<p>授業外学修：テーマの内容に関して統計資料や新聞記事等でその実態を把握すること。自ら調べた資料は持参し、また配布された資料を必ず読んで準備をすること。授業終了後は、得られた知識技術から現状分析を行い、課題解決に取り組んでみる。2～3時間の事前事後学習が必要となる。</p>			
<p>テキスト：使用しない。毎回資料を配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：『社会福祉小六法』（ミネルヴァ書房）、『家族法』『親族法・相続法』関係図書、政府刊行白書、関係機関のHP、新聞、専門雑誌等（具体的には授業内で指示する）</p>			
<p>学生に対する評価：平常点50%、レポート50%</p>			
<p>その他：具体的な内容・進め方については、受講者と話し合っ決めていきます。現代社会が抱える家族の課題を一緒に考えましょう。</p>			

授業科目名：発達心理学特論	単位数：4単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生物的存在でありながら社会的存在である人間の生涯にわたる発達について、発達に関する諸理論・学説を含め、説明できる。 2. 出生前期から老年期（これまでの老年期を超える高齢期を含む）までの各発達段階の特徴・課題・危機および変化について理解し説明でき、その知識・知見を支援に活用できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>生物的存在でありながら社会的存在である人間の生涯にわたる発達について、まず、発達に関する諸理論・学説を概観する。その後、周産期・乳児期・幼児期・児童期・青年期・成人期・老年期各発達期の課題とその発達支援について考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：発達とは</p> <p>第3回：その生物学的基礎Ⅰ；ヒトの発達の生物学的基礎</p> <p>第4回：その生物学的基礎Ⅱ；進化心理学と進化発達心理学</p> <p>第5回：社会文化的視点Ⅰ；社会的存在としての子ども</p> <p>第6回：社会文化的視点Ⅱ；発達の社会文化論</p> <p>第7回：周産期の発達Ⅰ；胎児期の身体的発達</p> <p>第8回：周産期の発達Ⅱ；胎児の脳・運動機能・感覚機能の発達と子宮外生活への準備</p> <p>第9回：乳児期の発達Ⅰ；乳児の初期の視覚</p> <p>第10回：乳児期の発達Ⅱ；乳児の社会的能力</p> <p>第11回：乳児期の発達Ⅲ；アタッチメントの成立</p> <p>第12回：幼児期の発達Ⅰ；表象以前と表象以後</p> <p>第13回：幼児期の発達Ⅱ；ことばの発達</p> <p>第14回：幼児期の発達Ⅲ；幼児期の家族、仲間</p> <p>第15回：これまでのまとめと討論</p> <p>第16回：児童期前期の発達Ⅰ；集団において子どもはなにを経験するのか</p> <p>第17回：児童期前期の発達Ⅱ；遊び・けんか・学びの中でのコミュニケーション</p> <p>第18回：児童期後期の発達Ⅰ；社会的事象の理解</p> <p>第19回：児童期後期の発達Ⅱ；道徳性の発達</p> <p>第20回：青年期前期の発達Ⅰ；青年の知的発達</p> <p>第21回：青年期前期の発達Ⅱ；自己の発達－自己概念・自尊感情・自己調整</p> <p>第22回：青年期後期の発達Ⅰ；アイデンティティと青年の人格発達</p> <p>第23回：青年期後期の発達Ⅱ；職業選択</p> <p>第24回：成人期の発達Ⅰ；親になること－愛着と養育・養護</p> <p>第25回：成人期の発達Ⅱ；中年期の危機</p>			

第26回：老年期の発達 I；老人の知的能力

第27回：老年期の発達 II；幸福感

第28回：ふたたび発達とは：まとめと討論

授業外学修：

授業前には指定した文献を読み、要約してくること（2時間程度の学習時間を要する）。

テキスト：未定

参考書・参考資料等：授業中に指示する。

学生に対する評価：評価割合は質疑応答(30%)、試験(70%)とする。

その他：

授業科目名：臨床心理学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：近喰ふじ子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>「臨床心理学」の成り立ちという入り口を重要と考え、それを発端に臨床場面でのさまざまな面での取り組みがあることから、その考え方や理論について学ぶ。</p> <p>この授業の到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床心理学とは何かを学び、人間学として理解できる。 2. 臨床心理学の考え方、理論について説明できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>「臨床心理学」は「応用心理学」という概念で包括されていた時代があった。すなわち、基礎心理学の応用という考え方でいいのか？ということになる。しかし、何が基礎か？と考えるとこれまた意見の分かれるところとなる。そもそも心理臨床という行為が成り立つのかどうかということにもなる。そこで、ここでは人のこころに関わる領域であると考えを大事にしたうえで、こころの営みをとおしての面を重視して講義をおこなうこととする。脳がどのように関わっていくのかについても触れていきたい。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：臨床心理学とは何かを学び、理解する（人間学としての理解）</p> <p>第2回：臨床心理学の対象と特質を考える</p> <p>第3回：臨床心理学の歴史（聡明、誕生、発展を通じて）</p> <p>第4回：臨床心理学の課題</p> <p>第5回：人間理解としての臨床心理学</p> <p>第6回：正常と異常、平均と価値</p> <p>第7回：個と集団</p> <p>第8回：発達と学習</p> <p>第9回：各種心理テスト（心理検査の条件、心理検査の実際、心理検査の使われ方）などを知ること で、今後に活かせるようにする</p> <p>第10回：テスト・バッテリーについて</p> <p>第11回：精神分析理論</p> <p>第12回：個人心理学理論</p> <p>第13回：芸術療法理論</p> <p>第14回：実際の場面での体験を通じ、言葉・態度や姿勢を始めとした前後での変化をレポートする</p>			
<p>授業外学修：夏季休暇中と冬期休暇中に体験を通じ、レポートをまとめ、提出する。</p> <p>毎回の授業のために2時間程度の学習時間が必要となる。</p>			
<p>テキスト：特に、定めない。</p>			
<p>参考書・参考資料等：特に、なし。</p>			
<p>学生に対する評価：平常点60%、体験レポート（夏季と冬期）40%。</p>			
<p>その他：特に、なし。</p>			

授業科目名：心理学特論	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：佐藤隆弘
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 心理学の基本的な考え方と研究方法について説明できる。 ● 心理学の各領域のアプローチ方法を学び、それぞれの違いについて説明できる。 ● 心理学の研究成果や研究方法が、どのようにして教育、福祉、医療、産業などの実践場面に応用されているのかを説明できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>心理学は人間行動を科学的に理解し、人々がよりよく生きるための知見を提供する学問である。現代社会においては、人々の心や行動に関する様々な問題が生じており、多くの分野で心理学の重要性がますます増している。この授業では、人間の行動について理解するための心理学の考え方や研究法を学び、いかにして教育や福祉などの実践分野に役立てられるのかについて考察する。さらに、受講者自身の研究テーマについて心理学の視点からどのようなアプローチができるのかを検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：心理学の成り立ち</p> <p>第2回：科学と心理学</p> <p>第3回：観察法</p> <p>第4回：実験法</p> <p>第5回：調査法</p> <p>第6回：知覚・認知心理学とその研究法</p> <p>第7回：学習心理学・行動分析学とその研究法</p> <p>第8回：パーソナリティ心理学とその研究法</p> <p>第9回：発達心理学とその研究法</p> <p>第10回：社会心理学とその研究法</p> <p>第11回：心理学と批判的思考</p> <p>第12回：2つの心理学：基礎と応用</p> <p>第13回：心理学の研究倫理</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：授業前に文献を読んで概要や疑問点をまとめておき、授業中のディスカッションに備える。授業後は、講義やディスカッションの内容を文書化して理解を深める。1回の講義ごとに、予習・復習を合わせて少なくとも200分程度行うこと。</p>			
<p>テキスト：初回の授業において相談の上、決定する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>中丸 茂 (1999) 『心理学者のための科学入門』, 北大路書房.</p> <p>W. J. レイ (著) ・岡田圭二 (編訳) (2013) 『改訂エンサイクロペディア心理学研究方法論』, 北大路書房.</p> <p>この他にも、授業の進行状況に応じて適宜紹介する。</p>			

学生に対する評価：

授業中のディスカッションへの参加状況など50%、最終レポート50%として評価する。

その他：

授業科目名：教育評価・測定法	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：井上俊哉
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>教育評価の意義・必要性を説明できる。</p> <p>目的に応じた適切な評価法・測定法を適用することができる。</p> <p>テストデータを適切に分析し、信頼性、妥当性の検証を行うことができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>指定の教科書を読み進める。重要な点については、さらに詳しい文献を読んで、理解を深めていく。教員側からの一方通行の講義形式はとらず、受講者からの積極的な発言も求める。予習・復習を怠らず、自ら学ぶ気持ちを持って授業に臨んでほしい。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：測定と評価</p> <p>第2回：教育評価と心理測定のための統計（得点分布，平均と標準偏差）</p> <p>第3回：教育評価と心理測定のための統計（z得点，偏差値）</p> <p>第4回：教育評価と心理測定のための統計（相関）</p> <p>第5回：相対評価と絶対評価</p> <p>第6回：絶対評価のためのスタンダード</p> <p>第7回：項目分析の方法</p> <p>第8回：テストの信頼性</p> <p>第9回：テストの妥当性</p> <p>第10回：絶対評価における信頼性・妥当性</p> <p>第11回：知能・性格の心理学</p> <p>第12回：テストの実際（知能テスト）</p> <p>第13回：テストの実際（性格テスト）</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>毎回の授業の学修内容について、次回の授業までに要点をまとめて提出すること。（2時間程度の学習時間が必要）</p>			
<p>テキスト：</p> <p>梶田叡一「教育評価」（有斐閣）</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>日本テスト学会「見直そう，テストを支える基本の技術と教育」（金子書房）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業中の発言（50%），レポート（50%）によって評価する。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 検査法演習	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 代表的な心理検査についてその理論的背景、特徴、有効性、限界について述べるができる。 2. 代表的な知能検査（WISC-IV、田中ビネーV、K-ABC II等）を実施できる。 3. 心理検査をアセスメントに適用できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>心理検査を使う最終目標は、他者や自己を理解するという実践的なものであるが、なぜ心理検査で知的能力や性格を測定できるのかという理論的背景を知らずにこれを利用することは危険である。この授業ではいくつかの代表的な心理検査について、理論的な知識を持ったうえで有効性や限界などを検討しつつ、その実施法・利用法を学ぶ。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：心理検査とは</p> <p>第3回：知能検査</p> <p>第4回：田中ビネーVを学ぶ I；その特徴と実施法</p> <p>第5回：田中ビネーVを学ぶ II；分析と解釈</p> <p>第6回：WISC-IIIを学ぶ I；その特徴と実施法</p> <p>第7回：WISC-IIIを学ぶ II；分析と解釈</p> <p>第8回：WISC-IVを学ぶ</p> <p>第9回：K-ABCおよびK-ABC IIを学ぶ I；その特徴と実施法</p> <p>第10回：K-ABCおよびK-ABC IIを学ぶ II；分析と解釈</p> <p>第11回：ITPAを学ぶ</p> <p>第12回：性格検査</p> <p>第13回：発達検査・その他の検査</p> <p>第14回：心理検査によるアセスメントについて</p>			
<p>授業外学修：授業前には指定した手引き、解説を熟読してくること（3時間程度の学習時間が必要）。</p> <p>授業後にはレポートを提出すること（2～3時間程度の学習時間が必要）。</p>			
<p>テキスト：未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：各種テスト手引き、解説</p>			
<p>学生に対する評価：授業中の発言・行動（70%）、レポート（30%）によって評価する。</p>			
<p>その他：提出されたレポートに対してはフィードバックを行い、再度提出を要請することもある。</p>			

授業科目名：高齢者心理学特論	単位数：2単位	選択 (高専 (公民))	担当教員名：西村純一
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>①生涯にわたる心身の加齢変化とともに、高齢者の心身の特徴について述べることができる。</p> <p>②生涯にわたる発達課題とともに、高齢期の人間的成長の特徴について述べることができる。</p> <p>③幸福な老いの3要素、すなわち「病気と障害から守る」「身体機能と認知機能の維持」「社会参加」について知るとともに、それらの問題への対応について考えることができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>身体・感覚・知覚・記憶・学習・知能・知恵・創造性・パーソナリティ等の加齢変化について学ぶとともに、高齢者の心身機能の特徴についての認識を深める。生涯にわたる発達課題が相互に関連していることを学ぶとともに、高齢期の人間的成長や可塑性についての認識を深める。幸福な老い（サクセスフル・エイジング）の観点から日常生活における栄養・運動・睡眠・ストレス対処、認知機能を維持するための運動・学習・社会活動・余暇活動、社会的つながりを維持するための社会参加についての認識を深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：生涯発達やエイジングをどのような視点からとらえるか</p> <p>第2回：生涯発達の基盤となる身体機能の変化</p> <p>第3回：生涯にわたる認知機能の変化（1）感覚・知覚機能の加齢変化</p> <p>第4回：生涯にわたる認知機能の変化（2）記憶・学習の加齢変化</p> <p>第5回：生涯にわたる認知機能の変化（3）知能・知恵・創造性の加齢変化・熟達化</p> <p>第6回：生涯にわたるパーソナリティの変化</p> <p>第7回：生涯にわたる発達課題と相互の連関</p> <p>第8回：高齢期の知恵と老年的超越</p> <p>第9回：幸福な老い（サクセスフル・エイジング）の3要素</p> <p>第10回：病気や障害から守る生活習慣：栄養・運動・睡眠・ストレス対処</p> <p>第11回：認知機能を維持するための運動・学習・社会活動・余暇活動</p> <p>第12回：社会的つながりを維持するための社会関係・社会活動</p> <p>第13回：前向きな老い（ポジティブ・エイジング）の7要素</p> <p>第14回：まとめと解説</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>生活の様々な場面で高齢者を観察し、ひとりひとりの違いに注目する。（毎回の授業に対して2時間の予習復習が必要となる）</p>			
<p>テキスト：「成人発達とエイジングの心理学」ナカニシヤ出版</p>			
<p>参考書・参考資料等：「生涯発達心理学」ナカニシヤ出版</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点20%、小課題30%、レポート50%</p>			
<p>その他：小課題は、授業中に適宜、口頭で質問する。</p>			

授業科目名：社会調査法 I	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：山本和人
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>社会の様々な実態を把握するために用いられている社会調査の方法を理解し、自ら実施できるようになる。諸組織・諸機関で実施される社会調査の結果を分析・批判・検討し、きちんと読み取ることができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>教育学や社会福祉学、心理学に共通して用いられる研究方法として用いられている調査方法を理解する。各自の関心にもとづき、仮説やモデルを作り、調査探勝の選択から、質問紙の作成、実施、結果の分析まで、実習・演習を取り入れて、一通り実践的に理解する。論文作成や課題研究などに取り組み際に、理解しておいてほしいことを伝える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：社会調査の意義・目的と限界</p> <p>第2回：社会調査の原理と留意点</p> <p>第3回：社会調査の方法と種類</p> <p>第4回：社会調査の手順と計画の立案</p> <p>第5回：資料分析と仮説・モデルの形成</p> <p>第6回：理論構築と調査仮説の検討</p> <p>第7回：サンプリングの理論と方法</p> <p>第8回：調査票作成上の留意点と課題</p> <p>第9回：分析の方法と理論、多変量解析について</p> <p>第10回：基礎統計とその理解（1）データの分布と集団特性値</p> <p>第11回：基礎統計とその理解（2）集団間の関係と相関係数など</p> <p>第12回：基礎統計とその理解（3）変数間関係と予測</p> <p>第13回：検定について</p> <p>第14回：社会調査をめぐる倫理と調査報告、および、データの保管・公開</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>各自の関心を踏まえ、事前に各回のポイントを押さえ、まとめておく必要がある。そのやり方は初回に伝える。必要な学習時間は1～2時間程度、事後においても作業を伴う。</p>			
<p>テキスト：未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>未定。授業の中で指定、あるいは、配布。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>社会調査を実施する上での倫理、心構え、実施方法・手順、分析方法等を理解できているか、他の調査主体による調査票の分析ができるか、その結果の分析を正しく評価することができるかを見る。毎回の課題30%、小レポート30%、および、最終レポート40%で評価する。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 社会調査法Ⅱ	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：山本和人
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>質問紙を用いた大量観察による定量的調査方法とは異なり、現状を理解し、解釈し、そこから理論構築を図ろうとする方法である質的研究方法を適用し、実施できるようになる。また、その理論と技術・技法の基本を習得できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>教育学、社会福祉学、心理学に共通する研究方法としての社会調査のうち、質的な研究方法を教授する。調査対象数が非常に限定された事例研究の場合や、文字・テキストや語りについての内容分析、インタビューや言葉のやり取りなど、数量的にとらえられない対象についての研究方法について、一方的な講義ではなく、院生の関心を踏まえて、実習・演習方式を取り入れて行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：質的調査法と量的調査法の特徴と違い</p> <p>第2回：研究プロセスと質的研究の位置づけ</p> <p>第3回：質的調査法とその分類</p> <p>第4回：インタビュー調査と面接法</p> <p>第5回：参与観察法</p> <p>第6回：ドキュメントの分析</p> <p>第7回：映像データの分析</p> <p>第8回：音声データ、会話の分析</p> <p>第9回：ケーススタディについて</p> <p>第10回：研究のデザインとサンプルの選択</p> <p>第11回：観察者としての留意事項</p> <p>第12回：データ収集と分析、妥当性・信頼性の問題</p> <p>第13回：報告書執筆と理論構築</p> <p>第14回：調査者としての倫理</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>各自の関心・調査対象を踏まえ、調査報告探しや、事前にポイントをまとめるなどの作業が必要になる。そのため、各自の関心に応じた準備・事後の作業が必要となる。少なくとも、1～2時間ほど必要と考えられる。</p>			
<p>テキスト：未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>未定。授業の中で指定、あるいは、配布。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>自ら調査計画を立て、実施できるまでの理解が得られたか、理論構築につながる理解ができたかで評価する。毎回の討議50%、および、最終レポート50%で評価する。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：心理学研究法 I	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 心理学における実証的研究法について学び、研究目的にかなった研究法を選択できる。 2. データの性質に応じた適切な分析ができる。 3. 心理学研究論文を批判的に読むことができる。 4. 研究計画を立案できる。 5. 研究倫理に基づいて研究できる 			
<p>授業の概要</p> <p>「ある」けれども「実体としてしめすことのできない」人の心を心理学は研究の対象にしている。そこで、心の研究を進めるために心理学はさまざまな研究法を発展させてきた。心理学研究法 I ではこの多彩な心理学の研究法について、実験、観察、調査という代表的な研究法を柱に整理しその中に新しい研究法の流れのいくつかを取り上げ、その意義と限界を検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：心理学の研究と心理学の研究法（1）実証研究の論理</p> <p>第2回：心理学の研究と心理学の研究法（2）研究法とその選択</p> <p>第3回：実験法の基本的考え方</p> <p>第4回：実験計画法（1）研究計画の進め方</p> <p>第5回：実験計画法（2）要因計画法の手順</p> <p>第6回：実験室実験、現場実験、アクションリサーチ</p> <p>第7回：観察法の意義</p> <p>第8回：観察法の実際（1）観察方法と記録法</p> <p>第9回：観察法の実際（2）実践例と留意点</p> <p>第10回：観察、面接、フィールドワーク</p> <p>第11回：質問紙調査法の特徴</p> <p>第12回：質問紙尺度の構成（1）質問紙調査研究の流れと標本抽出法</p> <p>第13回：質問紙尺度の構成（2）心理尺度の構成</p> <p>第14回：研究の倫理</p>			
<p>授業外学修：授業前には指定した資料・文献を熟読してくること（1時間の学習時間を必要とする）。授業後にはレポートを提出すること（2時間程度の学習時間を必要とする）。</p>			
<p>テキスト：未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：心理学研究法入門（東京大学出版会）</p>			
<p>学生に対する評価：授業中の質疑応答（50%）、レポート（50%）によって評価する。</p>			
<p>その他：課題（レポート等）に対してはフィードバックを行う。</p>			

授業科目名：心理学研究法Ⅱ	単位数：2単位	選択 (高専(公民))	担当教員名：井森澄江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 心理学における実践研究について学び、研究目的にかなった研究方法を選択できる。 2. データの性質に応じた適切な分析ができる。 3. 実践研究の研究計画を立案できる。 4. 研究倫理に基づいて研究できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>心理学研究法Ⅱでは特に観察法、教育的介入法、事例研究、心理検査法を取り上げる。これらは教育・支援現場において心を捉える重要な方法といえよう。研究テーマを選んだうえで、これらの方法のうちのいくつかを用いてデータをとり、分析を行いレポートにまとめる。その過程で具体的手法を学ぶとともに、それぞれの長所を利用して心をいかに理解できるか検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：観察法</p> <p>第3回：集団場面における幼児の行動分析の実際（1）記録法</p> <p>第4回：集団場面における幼児の行動分析の実際（2）分析とその妥当性・信頼性</p> <p>第5回：教育的介入法</p> <p>第6回：教育的介入法による研究の実際</p> <p>第7回：事例研究</p> <p>第8回：事例研究のタイプとその実例</p> <p>第9回：心理検査法</p> <p>第10回：人格検査（1）質問紙法</p> <p>第11回：人格検査（2）投映法</p> <p>第12回：知能検査（1）ビネー式とウエックスラー式</p> <p>第13回：知能検査（2）WISC-IV、K-ABC、K-ABC II、ITPA</p> <p>第14回：心理検査によるアセスメントについて</p>			
<p>授業外学修： 授業前には指定した資料・文献を熟読してくること（2時間程度の学習時間が必要）。授業後にはレポートを提出すること（2時間程度の学習時間が必要）。</p>			
<p>テキスト：未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業において資料を配布する。</p>			
<p>学生に対する評価：授業中の質疑応答（50%）、レポート（50%）によって評価する。</p>			
<p>その他：課題（レポート等）に対してはフィードバックを行う。</p>			

授業科目名：研究指導 特別研究	単位数：10単 位	必修	担当教員名：5名
<p>授業の概要</p> <p>教育学及び社会福祉学、心理学分野とその隣接領域に関して、研究の実践、指導を行い、またこれらについて論文指導を行う。</p> <p>(平戸ルリ子)</p> <p>子どもの支援、中でも社会的養護を必要とする子どもの支援について、研究テーマを設定し、修士論文の作成を指導する。</p> <p>(井森澄江)</p> <p>子どもの社会的発達に関心のある学生を対象に、個別に研究テーマを設定し、その研究テーマに関する修士論文の作成を目指して指導する。</p> <p>(山本和人)</p> <p>成人の学習・教育、及び家庭教育や地域社会における教育について関心のある院生を対象に、各人の関心から研究テーマを設定し、修士論文の作成を指導する。</p> <p>(佐藤隆弘)</p> <p>福祉・教育に関わる問題について、心理学の観点から分析することに関心がある学生を対象に指導を行う。設定したテーマをもとに研究計画を立て、データの収集と分析を行い、論文作成を進める。</p> <p>(田中恵美子)</p> <p>障害（身体または知的）に関する支援及び政策等に関心のある学生を対象に、各自の問題関心に合わせてテーマを設定し、修士論文の作成を指導する。</p>			